令和８年度　学校自己評価システムシート　（ さいたま市立向小学校 ）　　学校番号　０４２

【様式】

学校教育目標	かしこく　やさしく　たくましく　なかよく
目指す学校像	「夢と希望をはぐくむ楽しい向小」 ○児童の笑顔があふれ、エージェンシー（主体的な力）が発揮される学校　○教職員が組織で連携し、「時代の要請」に応じた質の高い教育を行う学校　○学校・保護者・地域が、子どもの声を真ん中に置いて協働する学校
重点目標	**◎誰一人取り残さない教育、個別最適な学びに向けて、積極的な取組の実践** ※子どもが「主体的に、本気で学ぶ授業」を創造し、子どもたちの「Well-being」の実現 1　基礎基本の確実な定着 2　児童一人ひとりを大切にする姿勢（教育相談体制の充実、積極的な生徒指導の推進） 3　楽しく笑顔あふれる学校づくりと「自治力」の育成（学校・家庭・地域が連携・協働したコミュニケーション力の育成） 4　美しく、安全・安心な「デジタル×リアル」環境づくり（豊かな心の醸成） 5　教職員の Well-being を実現する「協働」の組織づくり

達成度			
達成度	A	ほぼ達成	（８割以上）
	B	概ね達成	（６割以上）
	C	変化の兆し	（４割以上）
	D	不十分	（４割未満）

※重点目標は５つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

学校自己評価								学校運営協議会による評価
年度目標					年度評価			実施日令和８年２月２４　日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1 （学びの質の向上に関する取組）	**学びの質の向上** （現状） ○授業規律が定着しており、学習活動に積極的に参加する児童が多い。 ○SSSP（スマートスクールプロジェクト）の推進により、１人１台端末の日常的な活用が定着し、デジタル学習基盤が整っている。 （課題） ○自ら新しい学びに挑戦し、開拓する児童が少ない。 ○「教え込む指導」から脱却し、児童の可能性を引き出す「コーチング的指導」への転換をさらに進める必要がある ○思考プロセスを「言語化」し、自らの学びを調整する「振り返り」の質を高め、自立した学習者を育成する必要がある。	・児童が「本気」で学び、エージェンシーを発揮して自律的に学習を調整できる授業の創出。 ・デジタル学習基盤を最大限活用した、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実	① コーチング的指導へ転換し「じ・しゃ・く」を徹底。全級で振り返りを日常化し思考の言語化能力を高める。 ② ダッシュボード等のデータを活用し個の強みを伸長。一人ひとりに最適な支援と学びの改革を組織で推進する。 ③ 教科書をツールに活用し深い理解へ繋げる授業へ転換。横断的探究活動で批判的思考力を育成する。 ④ チェックリストで成長を可視化しタイピング平均６０字を達成。情報モラルと活用能力を抜本的に向上させる。。	①②学校評価を 90%以上にする。 ③ 「振り返り（言語化）」の実施率：全ての学級において、各単元の終末に児童が自らの学びを調整する振り返り活動を実施する。 ④ 情報スキルの達成度： 全校平均タイピング速度 60 字/分以上を実現する。				
2 （子どもの発達や心のサポートに関する取組） （地域とともにある学校づくりに関する取組）	**子どもの発達や心のサポート** （現状） ○「スクールダッシュボード」の導入により、児童の小さな変化をデータで捉え、組織的に対応する基盤が整いつつある。 ○児童会が主体となった「あいさつ運動」などの自治的活動が継続して実施されている。 （課題） ○不登校やその傾向にある児童への、個々の実態に応じた柔軟な学びと居場所の保障が引き続き急務である。 ○児童が自ら学校生活をより良くしようとする「自治力」や「エージェンシー」の一層の育成が必要である。	・児童一人ひとりの状況に寄り添った教育支援・相談体制の充実	①小さな変化を早期に発見・分析し、複数の目による迅速な組織対応を徹底する。 ②「心を潤す 4 つの言葉」や「ぽかぽか言葉」の推進、読書活動等を通じて、潤いのある教育環境と豊かな情操をはぐくむ。 ③Sola るーむの効果的な活用を推進する	①学校評価を 95%以上にする。 ②スクールダッシュボードを活用したケース会議や、SSW・SC 等と連携した組織的な個別指導・支援が定期的に行われているか。				
		・児童の自治力を育む積極的な生徒指導と社会参画の推進	①児童が行事の企画・運営に主体的に参画し、自分たちの力で学校生活を改善する経験（自治力）を積ませる。 ②学校運営協議会等を通じて、児童が地域の人々と協働し、地域の課題解決や多世代交流に参画する機会を創出する。	①児童会等から出された提案が、年間 1 回以上実際に具現化されたか ② いじめアンケート（全校）を定期的に実施し、全ての事案について組織的対応が迅速に行われたか				
3 （地域とともにある学校づくりに関する取組）	**地域とともにある学校づくり** （現状） ○コミュニティ・スクールの活動として挨拶運動等が実施され、R7 年度は学校評価で 78%の肯定的な回答を得られた。 ○学校運営協議会への児童の参加・提案が始まっており、児童の声を反映させる基盤ができつつある。 （課題） ○地域と学校が共に教育目標を共有し、課題解決に取り組む「連携・協働」への深化が必要である。	・地域社会と連携した児童のエージェンシーの育成と活動の可視化 ・「社会に開かれた教育課程」の推進による組織的な協働体制の構築	①児童が学校運営協議会において地域課題の解決策を提案・実践する機会を確保し、地域社会への貢献を通じて主体性を育む。 ②デジタル広報による活動の可視化をする ③PTA、SSN、地域人材と連携し、SDGs や探究学習等の教科横断的な学習において地域をフィールドとした体験活動を推進する。 ④コミュニティ・スクール主導による挨拶運動を継続し、児童自らが企画・運営する主体的な運動へと移行を図る。	①学校評価を８０％以上。 ②学校運営協議会への児童参加を年間３回以上実施し、児童の提案に基づく地域協働活動が実現されたか。 ③デジタルツールによる情報発信の頻度および保護者アンケート等による「学校の情報提供」への肯定的な評価。				
4 （教育環境の整備に関する取組）	**教育環境の整備** （現状） ○学校評価（児童・保護者・教職員の肯定的回答は 93%であり、高い水準を維持している。 ○管理職による毎日の巡視、安全点検、環境ボランティアによる活動が定着している。 （課題） ○開校 30 周年を控え、さらなる「清潔な向小」を目指した計画的な環境整備が求められる。	・美しく安全・安心な「デジタル×リアル」の教育環境の維持・向上 ・30 周年を見据えた計画的な施設整備と校務 DX による教育活動の高度化	①毎月の安全点検を複数の目で実施し、不具合箇所への即日対応を徹底する。特に熱中症対策を含む季節に応じた安全管理を強化する。 ②30 周年に向けた環境美化の推進し、清潔な学習環境を創出する。 ③スクールダッシュボード等の教育データを活用し、児童の小さな変化（SOS）を早期に発見・支援する環境を整える。	①学校評価を９０％以上。 ②安全点検による指摘箇所の即日対応。				
5 （教職員のキャリア形成に関する取組）	**教職員のキャリア形成** 〈現状〉 ○平均年齢が約 37 歳、平均経験年数が約 11 年と比較的若く、活気ある組織である一方、高度な生徒指導や保護者対応の経験継承が課題となっている ○4 月の時間外在校時間 80 時間以上が 7 人いる。 〈課題〉 ○多忙感の解消が道半ばであり、教職員が心身ともに余裕を持って児童と向き合うための「余白」の創出が不可欠である。 ○若手教員の早期育成に向け、「個業」から「協働」へとシフトし、組織全体で支え合う「チーム向小」の文化をさらに定着させる必要がある。 ○前年踏襲にとらわれず、時代の要請（生成 AI 活用や探究的な学び）に応じた専門性の向上が求められる。	・若手支援体制の確立と組織的な専門性の向上 ・教育 DX と「質的な働き方改革」の推進による教職員の Well-being の実現	① 若手教員に対する日常的な授業公開・事後指導、悩み相談の場を構造化し、組織的な指導力の底上げを図る。 ②研修履歴の記録・活用を通じ、教職員が自らの課題に応じた自律的な学びを継続できるよう管理職が受講を奨励・支援する。 ③生成 AI の校務利用や校務支援システムの高度利用により事務作業を徹底的に効率化し、生み出した時間を児童理解や教材研究に充てる。 ④ 「向小スタンダード」に基づく健康・服務管理：月ごとの事故防止チェックリスト活用に加え、時間外在校時間「月 45 時間以内」の厳守、年休 10 日以上の取得を目標とした健康確保措置を徹底する。	①全ての教員が、自らの課題に基づいた授業研究を年間２本以上実施し、ICT を活用した授業改善を実感できるようにする。 ②月の時間外在校時間が 45 時間を目指し教職員の Well-being（働きがい・健康）を向上させる。				